

# とらわれないで

ちがみ よういち  
千頭 洋一

● U A ゼンセン・政策・労働条件局・部長

冒頭から深刻な話で恐縮だが、2011年のいわゆる「就活自殺」は、150件である。遺書にそう記されていたのがこの数だから、実際はその数倍に及ぶだろう。若年雇用やメンタルヘルスの対策が、より求められることは言うまでもない。一方で、「名の通った企業の正社員になれなければ落伍者」といった価値観が植えつけられていることの危険を、私たちは顧みなくてはならない。正社員といった既定路線ではなく、先の見通せない道を必死に歩んでいった結果、画期的な成功を収めた人は数多くいる。独自にキャリアを拓いていくことは容易ではないが、彼、彼女らには本来無限の可能性があったはずだ。

就職して3年以内に中卒の7割、高卒の5割、大卒の3割が離職することが、「七五三現象」と呼ばれて久しい。確かに、多少の理不尽さや困難、見込み違いを理由に簡単に離職しては、理想とするキャリアを形成できないだろう。だが、この仕事を続けていくことが、どうしても耐えられそうにないと冷静に判断するならば、退職という選択肢もあって良い。「せっかく良い会社に正社員で就職できたのだから、我慢なさい」と言われ、苦痛に喘ぎながらジレンマに陥り、心身を病んでしまうことも少なくないだろう。

若者に生活の安定や損得勘定ばかりをもとにしたキャリアの価値観が植え付けられることで、自由な発想や行動にも制限が加えられることも不幸である。就職戦線や景況が厳しいことは、

十分に理解しているが、「まともに生きていくには、名の通った企業の正社員しかない」ということはないのである。大学も自らの生き残りをかけて、必死に就職支援をする。それは学生にとっても良いことだろう。しかし、新卒で著名企業に入れなければ、その後の人生が真っ暗というわけではない。

学生は、名の通った会社に入るために、小手先の応答技術を身につけるより、もっとやるべきことがあると思う。仕事の即戦力にならないにしても、きちんと専門領域を学ぶことが必要である。仕事をすることで求められるのは、たとえば他人の気持ちに気づき、即応するような繊細な感性や行動力だろう。こうしたものを身につけることも、学生時代の重要な課題のひとつではないか。

私たち社会人の先輩がすべきことは、若者とのきっちりした対話だと思う。その中で、まずはその若者の良さを認めることが肝要である。その上で何に興味があって、何が得意なのか、どういうキャリアを築いていきたいのか、社会にどう貢献していきたいのか、そのために何を学び経験すると良いのか、こうした対話の中から、本人がこれから進む道を主体的に選択していく。そうすれば、その後に路線変更しても、後悔は少なくて済むだろう。きちんと若者の話を聴いて、一方的な価値観だけにとらわれずに、本人のキャリアと幸せを一緒に考えていく。これを根気よく努めていくことが、私たち一人ひとりの使命だと思う。